琉球大学学術リポジトリ

高校生の家庭科に対する意識：21世紀型能力の育成に向けて

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2015-11-24
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 土屋, 善和, Tsuchiya, Yoshikazu
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32647

高校生の家庭科に対する意識
—21 世紀型能力の育成に向けて—

琉球大学教育学部　生活科学教育
土屋善和

High school students' of home economics education
—For developing 21st century abilities—

Yoshikazu TSUCHIYA

1. 研究の背景と本研究の目的

今日、複雑な社会の変化に対応することができるように文部科学省では、「生きる力」や「確かな学力」を経て「21 世紀型能力」が初等中等教育において育成されるべき資質・能力として検討されている。

21 世紀型能力とは、「『生きる力』としての知・徳・体を構成する資質・能力から、教科・領域横断的に学習することが求められる能力を資質・能力として抽出し、これまで日本の学校教育が培ってきた資質・能力を踏まえつつ、それらを『基礎』『思考』『実践』の観点で再構成した日本型資質・能力の枠組み」(文部科学省　2014a) である。そして 21 世紀型能力は、「思考力」を中核として、それを支える「基礎力」、その使い方を力向づける「実践力」という三層構造で構成されている。

まず「思考力」として、「問題解決・発見力や創造力」、「論理的・批判的思考力」、「メタ認知・適応的学習力」が挙げられている。次に「基礎力」は「言語スキル」、「数量スキル」「情報スキル」といった「思考力」と「実践力」の基盤となる力が挙げられている。最後に「実践力」をみると、「自律的活動力」や「人間関係形成力」といった主体的に生活を営んでいくことができる力と「社会参画力」や「持続可能な未来への責任」といった社会の一員として、社会へ働きかけていくことができる力が挙げられている。特に初等中等教育の最終段階である高校生にとって、生活者として社会の担い手として 21 世紀型能力の獲得を学校教育の中で十分に保障する必要があるだろう。

21 世紀型能力を育成するためにはどのような授業を展開する必要があるのだろうか。今後の教育について「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問)」(文部科学省 2014b) によると、児童・生徒に必要な資質・能力の育成のためには、「どのように学ぶか」といった学びの質や深まりを重視し、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習 (いわゆる「アクティブ・ラーニング)」の指導方法等を充実させる必要があることが明記されていた。つまり、これからの学校教育では、生徒同士の関わり合いを重視した生徒主導の学びが必要であり、教師は体験的な学びをいかに授業の中で取り入れていくかを思考しなければならないのである。

こうした 21 世紀型能力の育成が指向される学校教育の中で、家庭科はどのような役割を担うことができるのだろうか。2009 年に改訂された高等学校学習指導要領解説家庭編によると、家庭科の目標は、「人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・家庭と社会とのかかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる」である。また土屋・堀内 (2012a) は、家庭科を「生活ができるレベルの家事技術の習得のためではなく、自分の生活をどのようにデザインしていくかを考え、実践できる力を育成する教科」とみなし、「自分がどのように生活や社会に対して働きかけていくかを主体的に考える力」である「生活を創造する力」を家庭科の学力として捉えていた。ここから家庭科は

学校教育において、現在・将来の生活を創造していく上で必要な力を身につけることができる教科と考えられる。

したがって家庭科は、学習指導要領の目標にも掲げられているように社会との関わりをもった教科であること、そして生活を問い直し思考していくことで実生活に活かされる力を志向した教科であることからも、学校教育において21世紀型能力を身につけるために重要な教科となりえる。

一方で、家庭科の学習について、実際に学習をしている高校生はどのように捉えているのだろうか。土屋・堀内(2012b)は、全日制課程(以下全日制)の生徒と定時制課程(以下定時制)の生徒の家庭科観について調査をした。「生活に関する知識」「生活について考える力」が家庭科で身につく力だと思うと回答した生徒の割合は定時制の生徒の方が全日制の生徒よりも低率である一方で、「自分の意見を表現する力」が家庭科で身につくと捉えている生徒の割合は定時制の生徒の方が全日制の生徒よりも高率であるという結果が出ていた。つまり、定時制の生徒の方が全日制の生徒よりも「自分の意見を表現する力」が家庭科で身につくと捉えていたのである。他にも家庭科の目標として「根拠を持ち判断できるようにするため」、「生活の課題や問題を発見できるようにするため」と捉えている生徒の割合も定時制の生徒の方が有意に高率であった。定時制の生徒は生活の知識・技術のみではない目標を家庭科の学習に見出していたことがわかった。

また土屋(2014)は、高校生の捉える家庭科で身につく力について他教科との比較から分析・考察した。「知識や技術」、「知識や技術を活用する力」が家庭科で身につくと回答した生徒の割合は他教科に比べ高率であったが、「問題や課題を発見し、解決する力」、「自分の意見や考えを持つ力」、根拠を持ち判断する力」、「自分の意見や考えを発言・表現する力」は、他教科と比較すると家庭科で身につくと思う生徒の割合は低率であったことがわかった。高校生にとって家庭科は、他教科と比べ生活に活かされる力が育成できる教科という捉えではなかったことが明らかとなった。

以上のような生徒の家庭科で身につく力に対する捉えがある中で、高校生は家庭科をどのような教科と認識しているのだろうか。次に高校生の家庭科に対する意識を把握する必要があると考えた。現在家庭科教育を受けている高校生の意識は実際に受けた家庭科の授業に由来するものである。つまり高校生の意識を調査することで、高校生にとって家庭科はどのような教科となりえているのか、高校での家庭科教育の現状を理解することにもつながるだろう。そして家庭科観の現状を把握することは、高校段階での家庭科には何が不足しているのか、またどのような学習を展開すればよいのか、今後家庭科教育の在り方を考えるための手立てともなる。

したがって本研究は、高校生を対象とした質問紙調査から高校生の家庭科に対する意識を明らかにすることを目的としている。そして高校生の意識から家庭科教育の現状と課題を把握し、今後の学校教育における高校段階での家庭科教育の在り方を検討する。

2. 研究方法

研究方法は、「家庭科学習と生活意識に関するアンケート」を実施し、調査結果を分析・考察した。調査内容は高校生の家庭科のイメージや家庭科の中で学びたい学習内容といった家庭科観について問う内容と性別役割分業に対する考えについて問う内容である。調査方法は留置き式の質問紙調査である。実施日は2012年12月、対象は神奈川県下の進学校に通い、調査当時、家庭科の授業を受けていた高校1年生男子112名、女子82名の計194名である。なお集計にはSPSS統計パッケージver.18を使用し、統計的な有意性の検定には、$\chi 2$検定を行った。

1－3－2. 結果及び考察

(1) 家庭科はどのような教科か

まず「家庭科はどのような教科でしょうか」と尋ねたところ、図1のような結果が得られた。なお以降示すデータは、質問紙調査において「とてもそう思う」、「少しそう思う」と回答した生徒の割合を合わせて各項目に対して「そう思う」と回答した生徒の割合を示している。

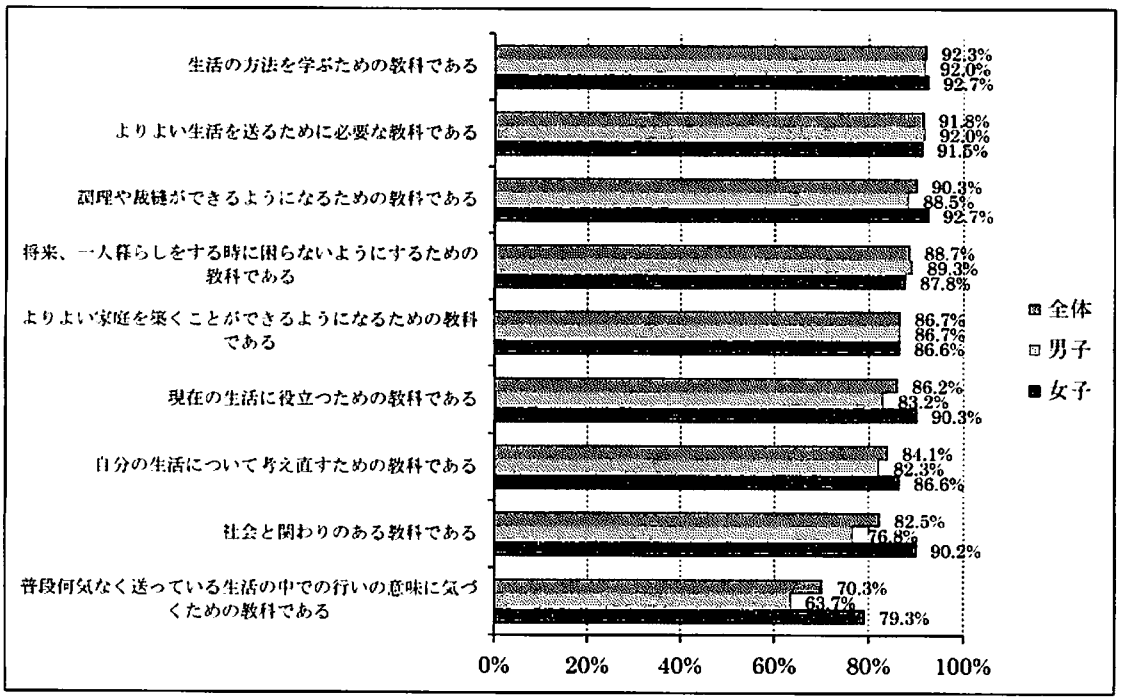

図１　家庭科はどのような教科か (N=194)

図１をみると、「生活の方法を学ぶための教科である」と思う生徒の割合は全体で92.3%、次いで「将来、一人暮らしをする時に困らないようにするための教科である」と思う生徒の割合が全体で88.7%であった。

一方、「社会と関わりのある教科である」と思う生徒の割合は全体では82.5%と８割以上の生徒が「そう思う」と回答していたが、男女で有意差があった。男子は76.8%、女子は90.2%と、男子の割合の方女子よりも有意に低率であった。また「普段何気なく送っている生活の中での行いの意味に気づくための教科である」と思う生徒の割合も男女の有意差があり、男子は63.7%、女子は79.3%と男子の方が「そう思う」と回答した割合は有意に低率を示していた。

この結果より、高校生は男女共に家庭科を「生活を営むためには必要な教科」であると捉えていることがわかった。しかし、男子生徒の方が女子生徒に比べ家庭科が社会と関わりのある教科という認識を持っていなかったことや、男子生徒の方が女子生徒に比べ家庭科が自分の生活を見つめ直す教科という認識を持っていなかったことが明らかになった。

女子生徒の方が男子生徒よりも、家庭科が社会と関わりのある学習内容の教科であること、今の自分の生活を見つめ直すことができる教科であることを認識していたことがわかった。つまり女子生徒は、家庭科が自分の身近な範囲にとどまらない生活の様々な側面に関わる学習と捉えていると考えられた。

(2) 家庭科のイメージ

次に、「家庭科に対してどのようなイメージを持っていますか」と尋ねたところ、図２のような結果が得られた。

「男女関わらず学習する意味のある教科である」と思う生徒の割合は全体で94.9%とほとんどの高校生が家庭科を学習する必要性を認識していることがわった。また「学校で学ぶ意味のある教科である」と思う生徒の割合は全体で83.1%、さらに「受験科目ではないけど必要な教科である」と思う生徒の割合は81.0%であった。

そのような捉えがある反面、「学習内容が理解しやすい教科である」と回答した生徒の割合は全体で68.2%、「学習内容が興味深い教科である」と回答した生徒の割合は全体で67.2%と「学習

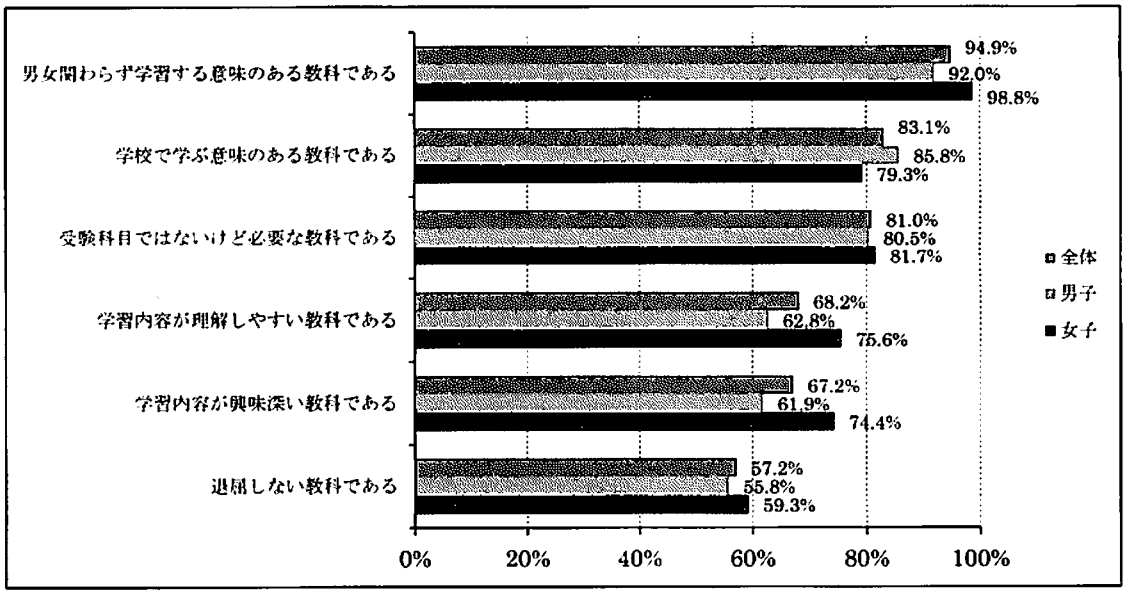

図2 家庭科はどのようなイメージ (N = 194)

内容」の興味・理解に関する項目では高率を示していないことがわかった。さらに「退屈しない教科である」と思う生徒の割は全体で57.2%と、4割以上の生徒は家庭科を退屈な教科だと捉えていることがわかった。

以上の結果より、家庭科は学習する意味のある教科であり、(1)の結果と同様、高校生は男女共に家庭科を学習する必要性を認識していることがわかった。しかし、全体として3割近くの高校生は学習内容に関しての理解や興味・関心がないこと、さらに高校生の半数近くが家庭科は退屈な教科というイメージを持っていたこともわかった。

本調査から高校生が、「家庭科」という教科自体に肯定的なイメージを持っていることが明らかになった。しかし、高校生は家庭科学習の必要性は認識しているものの、具体的にどのような学習内容が自分たちの生活と関係しているのかという理解が不足しており、自分の生活とつながっているということを根拠とした必要性を感じていない。このことが結果として家庭科学習に対する関心や意欲に影響していると考えられた。

(3) 家庭科の学習内容

次に家庭科の学習内容を10項目ならべ、「以下の家庭科の学習内容を学びたいと思いますか」と尋ねたところ、図3に示すような結果が得られた。なお今回は男女別の割合は示しておらず全体の「そう思う」割合のみ示している。

割合が高い順にみていくと、「食事と健康」の内容を学びたいと回答した割合が91.2%と最も高く、食に対する関心は非常に高いことがわかった。次いで「生活設計」が84.1%、「消費生活」が78.5%であった。

一方、「共生社会と福祉」は65.6%、「高齢期の生活」は65.5%と他の内容よりは低率を示していた。生徒が必要性を感じている内容は、現在の自分の生活の範囲内で考えられることに留まっており、自分の現在の生活とあまり関わりのない内容になると学びたいと思っていない、つまり必要性を感じない傾向になるのではないかと推察された。

(4) 家庭科の授業

次に「家庭科の授業に対してどのように思っていますか」と尋ねたところ、図4のような結果が得られた。

「実習があっておもしろい」と思う生徒の割合は全体で90.8%であり、9割以上の生徒は家庭科の授業において実習に楽しさを見いだしている

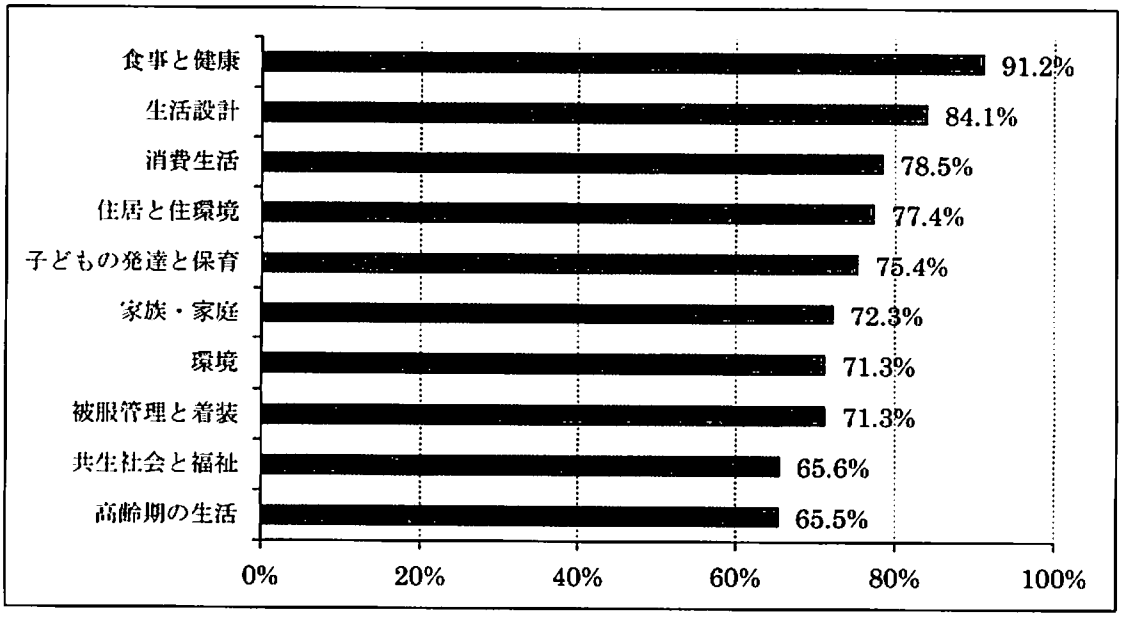

図3　家庭科の学習内容を学びたいと思うか(N=194)

ことがわかった。さらに「他の教科と比べて楽である」と思っている生徒の割合は全体で83.6%、「グループでの活動がある」と思っている生徒の割合は全体で83.1%と高率を示していた。

しかし「グループでの活動がある」と思うと8割以上の生徒が回答している一方で、「自分の意見や考えを表現できる場がある」と思う生徒の割合は全体で61%、「他の人と意見を交換する場がある」と思う生徒の割合は全体で58.5%であった。ここから家庭科において「グループ活動」は設定されているものの、意見や考えを表現する場としては不十分であると推察される。

さらに「自分の意見や考えを表現できる場がある」と思う女子生徒の割合は52.4%、「他の人と意見を交換する場がある」と思う女子生徒の割合も52.4%であり男子に比べ有意に低率を示して

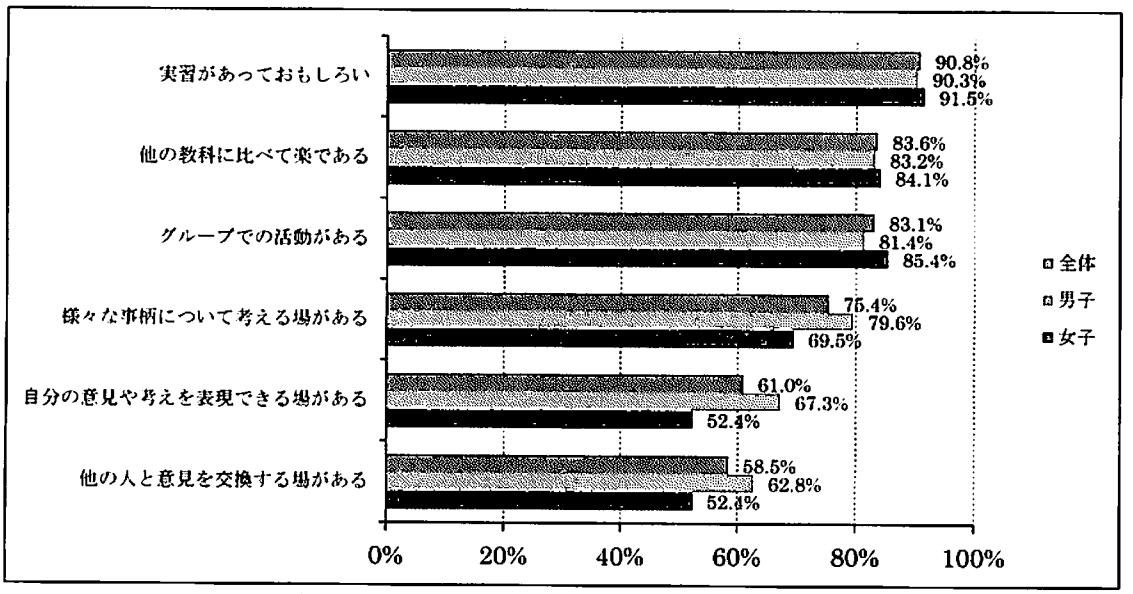

図4　家庭科の授業に対してどのように思っているか(N=194)

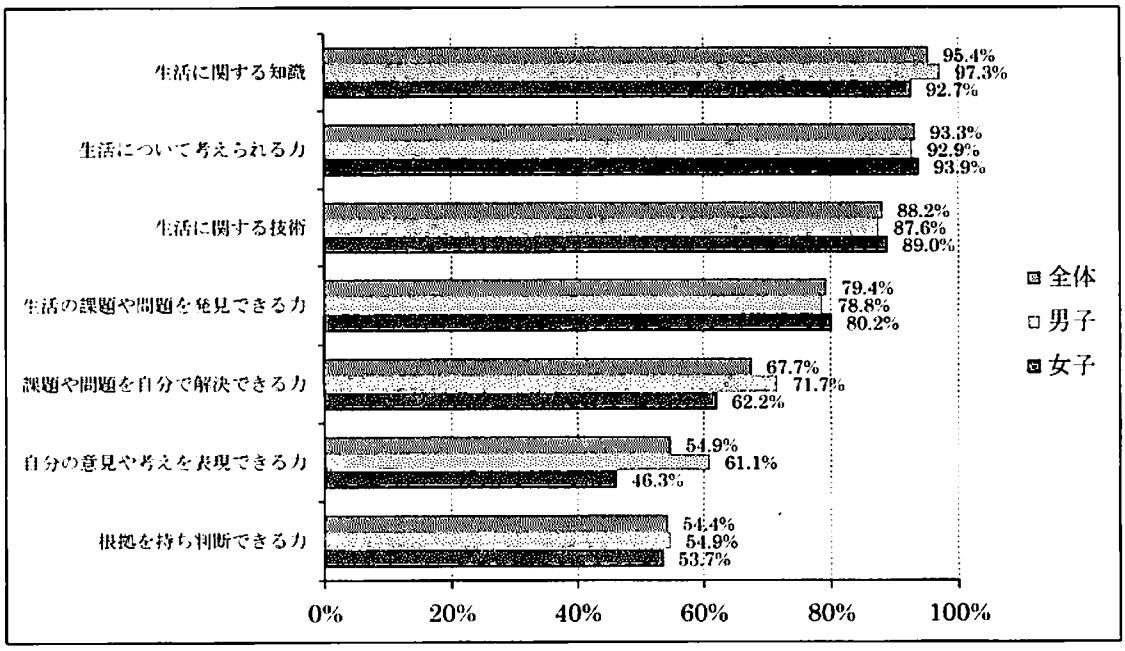

図5　家庭科の学習を通してどのような力が身につくと思うか (N=194)

いた。したがって、半数近くの女子にとって家庭科の授業には、自分たちの意見や考えを表現できる場が無いと考えられていることがわかる。自分の意見を表現できると考えている生徒が女子の方が少ないということは、男子生徒よりも女子生徒の方が家庭科に対してやりづらさを感じているとも考えられるだろう。

(5) 家庭科の学習で身につく力

次に、「家庭科の学習を通してどのような力が身につくと思いますか」と尋ねたところ、図5のような結果が得られた。

「生活に関する知識」と思う生徒の割合は全体で95.4%、「生活について考えられる力」と思う生徒の割合は全体で93.3%と9割以上の生徒が「そう思う」と回答していた。また、「生活に関する技術」と思う生徒の割合も全体で88.2%と高率であった。9割近い高校生が家庭科の学習が生活の知識・技術の習得につながると認識しており、実生活における基礎・基本の習得が目指された家庭科学習が展開されていることが推察される。

しかし、「自分の意見や考えを表現できる力」と思う生徒の割合は全体で54.9%、さらに男女別にみると女子生徒で「そう思う」と回答した割合は46.3%と男子生徒よりも有意に低率であった。これは(4)の結果で、「表現の場がない」と回答した生徒の割合が男子生徒よりも女子生徒の方が優位に低率であったことと関係していると考えられる。

また「根拠を持ち判断できる力」と思う生徒の割合も全体では54.4%と5割ほどであった。「根拠を持ち判断する力」とは、自分がどのようにしていくか妥当性を持って判断するという実生活における意思決定に関わるものと考えられ、実際の生活の中で活かされる力であるだろう。したがって、生活の知識・技術が身につく力と捉えている一方で、それらを実生活の中で活用して表現したり判断したりする力が身につくと考えている生徒はあまり多くないと考えられる。

(6) 性別役割分業に対する意識

最後に「生活に対する意識」として性別役割分業にかかわる家事や仕事に対する意識を生徒に尋ねたところ、図6のような結果が得られた。

「男女が協力して家事や育児を行う必要がある」と思う生徒の割合は全体で97.4%であり、次いで「男女共働きの場合、家事は平等に分担する必要がある」と思う生徒の割合は92.8%、「結婚し

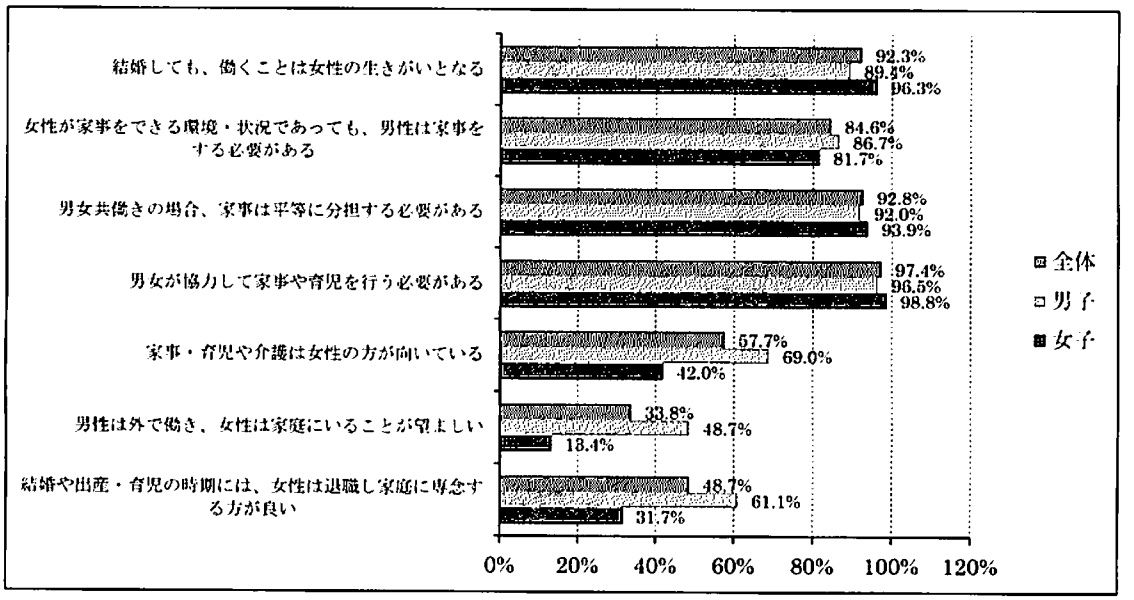

図6　性別役割分業に対する意識 (N=194)

ても、働くことは女性の生きがいとなる」と思う生徒の割合は全体で92.3%と、9割以上の生徒が「そう思う」と回答していた。また、「女性が家事をできる環境・状況であっても、男性は家事をする必要がある」と思うと回答した生徒の割合は全体で84.6%であった。上位4項目に関しては男女の有意差がないことから男女による意識の差異はないと考えられる。したがって、男女共に家庭生活における男女平等意識を持っていることがわかる。

しかし、残りの3項目をみると、男女の有意差があり、特に男子生徒の特徴が明らかとなった。「育児や介護は女性の方が向いている」と思う男子生徒の割合は69.0%と女子生徒の割合の42.0%よりも高率を示していた。また「男性は外で働き、女性は家庭にいることが望ましい」と思う男子生徒の割合は48.7%と、半数近い男子生徒は、おそらく将来妻になる人には家庭にいてほしいと思っていると考えられた。一方でこの項目に対して「そう思う」と回答した女子生徒の割合はわずか13.4%と2割にも満たなかった。つまり多くの女子生徒は将来、家庭を持った時に、将来自分だけが家庭に専念し男性だけが外で働くということに対して望ましいとは思っていないことがわかる。「結婚や出産・育児の時期には女性は退職し家庭に専念する方がよい」と思う男子生徒の割合は61.1%、女子生徒の割合は31.7%であった。

以上より、男女共に家庭生活における平等意識を持っている反面、家庭に対して望んでいることは男女に差があり、7割近い男子生徒は女性の方が、家事に向いていると考えており、さらに、女性に対して家庭にいて家事をしてくれることを期待している面もあることがわかった。

したがって特に男子生徒の特徴として、男女平等意識を持ちながら、根底では家庭生活において女性に求めることがあり、性別役割分業意識に対して肯定的な捉え方が少なからずあることがわかった。仮に「家庭科」を「家庭を営むための教科」という捉えがあるとしたら、そもそもの生活に対するこうした考えが家庭科の教科観に影響しているのではないかと推察される。

4. まとめ

高校生の家庭科観を調査したところ、高校生は男女ともに家庭科は生活に関わる教科として学習する意味があると捉えていることがわかった。一方で学習内容がわかりやすい、興味深いと思う生徒の割合はあまり高くなかった。さらに具体的な

内容として「高齢期の生活」や「共生社会と福祉」を学びたいと思う生徒の割合も高くなかった。このことから、高校生は家庭科学習の必要性は認識しているが家庭科の学習内容の何がどのように自分と関わり必要なのかというところまでの認識はなく、学習の意味づけができていないものと考えられた。

ところで、生活を創造するためには、生活に関わった身のまわりの内容を学習するだけでよいのだろうか。綿引(2005)は、「家庭生活をよりよくするためには、社会や地域など家庭外との相互作用・関連性の部分まで視野に入れる必要があるだろう」と述べている。「家庭をよりよくしていく」というとどうしても「身近な生活をどのようにしていくか」が重要視されるが、実はそれだけでは不十分であり、生活を取り巻く社会や地域にも目を向けていく視点が欠かせないのである。したがって、高校生が生活をよりよくするためには社会全体から自分の生活をどのようにしていくかを思考する必要があり、学習内容も生活と社会・地域のつながりを意識した内容がより一層重要なのである。

また家庭科の授業に関しては、グループ活動があると思う生徒が多い一方で、意見交換の場、表現の場が授業の中に設定されていると思う生徒は6割ほどであった。そうした授業の実態があることが、およそ半数の高校生にとって家庭科の学習で表現する力や判断する力といった実際の生活に活かされる力が身につくと捉えられていないことにつながっていると推察された。

道田(2007)は選択肢を挙げる思考を「拡散的な思考」とし、「より広い拡散」のためには、「自分とは考えの異なる『他人』との出会い」がポイントになると捉えていた。それは、「自分とは考えの異なる他人は、自分が気づかなかったことに気づかせてくれ、考える幅を広げてくれる」からである。つまり、他者と意見交換をしたり自分の考えを表現することは、「気づき」を促すと同時に視野を広げ思考の深まりを促すことにつながると考えられるのである。

他者との関わり合いながら自己の学びを深めていくという観点では「協同学習」が有効であるだろう。杉江(2011)によると「多様な意見を交わすことで多様な情報を得ることができ、よりよい解決に至る可能性が増す」ことが協同学習における学び合いの効果であるとしている。つまり他者との意見交換や表現の場といった「協同」の場面は思考の深まりを促すものであり、生活を創造する力の育成に寄与するのではないかと考えられる。

他者との関わりに関しては批判的思考研究者のEnnis,R.Hも重要視していた。Ennis(1987)は批判的思考の能力を4つ上げているが、その1つが「相互作用」である。「相互作用」とはディベートやプレゼンテーションなど他者との関わり合いであり、その中で多面的な視点や客観的な視点の獲得、さらに事柄の吟味・検討することに結びつくと考えられていた。つまり単に生徒が他者と関わるだけではなく、生徒が互いに「関わり合う」ことで思考力が身についていくと考えられる。

意見の交換や表現の場は、他者の価値観に触れる契機になると同時に自分の意見を客観的にみる機会にもなる。つまり、「気づき」を効果的に促すことができる場面であるだろう。さらに他者と意見を交換し、意見を吟味・検討していく中で自分の考えも練り上げていくことができ、生活を「築く」ことにつながるのである。

生徒が家庭科学習の本来の意義を見いだし、学習の意味づけをするためには、生徒が学習内容を自分自身の生活と関わらせて考えることが必要であると考えられる。佐伯(1990)は学習者の「内なる問いかけ」の活動により本当の「学び」が成立すると考えていた。生徒が自分の生活はどのように成り立っているのか、また自分が今までどのように生活を送ってきたのかなど自分自身の生活を客観的に見つめ直し生活を創ることが可能となる家庭科教育を目指さなければならない。

そうした高校生の学びには、授業を展開する教師の役割は非常に重要となるだろう。青木(2004)は、「日常生活を対象とする教科であることが、生徒の生活への興味・関心を高め理解を容易にしたり、日常生活への還元を保証するものではない」と述べている。生徒の学びを保障するためには、生活を題材にした学習内容を教師がどのように取り扱い、教材・授業展開を思考していくかが重要なのである。教師は、生活を題材にすれば生徒が

おのずと自分の生活に引きつけられると安易に考えるのではなく、教師自身も自分の生活を省みて、学習内容を再解釈した上で教師の自分の生活とも関わらせた授業を実践する必要があるだろう。

堀内(2013)は、「教師にとっても生活者としての自らのこれまでの生き方が問われ、教師自身の生活課題への『まなびほぐし』を余儀なくされる」と述べている。つまり教師も自らの生活を問い直し、家庭科の学習内容を吟味・検討していくことが必要であり、そうすることで高校生の実生活に迫る題材・教材、発問などを思考することができると考えられる。

家庭科の学習は、「生活に対する〈気づき〉から、生活の価値観を〈築く〉学習」(堀内　2006)であり、生活を創造する力を育むことをめざしたものである。しかし、高校生の捉えをみると、高校生にとっては必ずしも、家庭科はそのような教科とはなりえていないということが明らかとなった。特に家庭科を学ぶ最終段階である高校生にとって、自分がどのように生活を営んでいくのかを思考し実践する力を育むことは重要である。高校段階における家庭科教育では、教師自身が学習内容に関して吟味・検討した上で高校生が自分の生活とひきつけて思考することのできる題材・教材を設定し授業を組み立てていくこと、また学習に「協同」の場を設定することで、生活を創造する力そして21世紀型能力を育むことができるだろう。

引用文献

青木幸子(2004)「第7章　高等学校家庭科の授業づくり」中間美砂子編著『家庭科教育法―中・高等学校の授業づくり―』建帛社 pp.125-156

Ennis,R.H.(1987)A Taxonomy of Critical Thinking Dispositions and Abilities, Teaching thinking skills,pp.9-26

堀内かおる(2006)『家庭科再発見　気づきから学びが始まる』開隆堂,p.143

堀内かおる(2013)『家庭科教育を学ぶ人のために』世界思想社 pp.9-16

道田泰司(2007)「思考力を育てる」『学習研究』(428)pp.56-61

文部科学省(2009)『高等学校学習指導要領解説家庭編』p.5

文部科学省(2014a)『育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会―論点整理―』
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2014/07/22/1346335_02.pdf　(2015年4月19日アクセス)

文部科学省(2014b)『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm
(2015年4月28日アクセス)

佐伯胖(1990)『考えることの教育』国土社 pp.121-126

杉江修治(2011)『協同学習入門』ナカニシヤ出版,pp.24

土屋善和(2014)「高校生の捉える『家庭科で身につく力』―他教科との比較から―」『学校教育学研究論集』(30),pp.115-130

土屋善和・堀内かおる(2012a)「家庭科における『学力』再考」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ(教育科学)』(14),pp.71-84

土屋善和・堀内かおる(2012b)「高等学校定時制課程における生徒の家庭科観―全日制課程との比較から―」『日本家庭科教育学会学会誌』55(1),pp.34-42

綿引伴子(2005)「プロローグ　―家庭科とは何か―」荒井紀子編著『生活主体を育む　未来を拓く家庭科』ドメス出版 p.8